

『松本本草』の鳥類図 高橋達明
江戸時代のプリニウス 松田 清
虎豹を食う怪樹の話 小林清市

IV 人物

本草学の周辺——木村兼葭堂 田中優子
ものを集める心——ジョン・トラデスカントの
珍品・奇品館をめぐって 白幡洋三郎
新井白石と徳川吉宗 徳川時代の政治と本草
笠谷和比古

V 観物

博物の眼と臨床の眼 石田秀実
格物記 杉本秀太郎
手に入る本草書案内 桜井謙介
あとがき 山田慶児

山田慶児(編):物のイメージ,本草と博物学へ
の招待

上巻

まえがき(山田 慶児)

I 分類

本草における分類の思想……………山田 慶児
植物の属と種について……………木村陽二郎
東アジア本草学における「植虫類」…西村 三郎

II 記述

幕府典薬頭の手記に見える本草……………宗田 一
日本における救荒書の成立とその淵源
……………白杉 悦雄
清朝考証学派の博物学……………小林 清市
漢訳本前期密教經典にあらわれた医療関連記載
……………正木 晃

III 描写

秘伝花鏡小考……………塚本洋太郎
十八世紀の植物写生……………榊原 吉郎
江戸時代動植物図譜における転写……………磯野 直秀

下巻

IV 施策

徳川吉宗の享保改革と本草……………笠谷和比古
享保改革期の朝鮮薬材調査……………田代 和生
徳川吉宗の唐馬輸入……………大庭 脩
江戸時代の鳥獣とその保護……………安田 健

V 海渡

本草学と植物園芸……………白幡洋三郎
海峡の植物園 ペナンとシンガポール

……………川島 昭夫

イスラム圏の香料薬種商……………三木 亘

VI 考証

生薬の変遷——常山について……………桜井 謙介
小野蘭山本草講義本編年攷……………高橋 達明
稻生恒軒・若水の墓誌銘について……………杉立 義一

VII 企図

『本草綱目』を読むためのコンピュータツール
……………小野 芳彦

各章の節について記せば

山田慶児「本草における分類の思想」では

1. 世界像としての分類, 2. 類書の分類と字書・
正史, 3. 動植物の分類と三品分類, 4. 自然分類
と実用分類, 5. 技術的思考と分類, 6. 可能性と
しての分類, 7. 本草の終焉.

木村陽二郎「植物の属と種について」1. 植物
の学名, 2. アリストテレスの属と種, 3. 種とは
何か, 4. 属の考え, 5. 学名の成立, 6. 学名の確
立, 7. 日本の本草, 8. 『本草綱目啓蒙』の種とは,
9. 漢名と和名, 10. 日欧本草の接触とケンペル,
11. リンネの弟子ツェンベリ, 12. シーボルト
と伊藤圭介, 13. 宇田川榕菴の植物学, 14. 飯沼
慾斎の植物誌, 15. 松と杉, 終りに.

第3の論文, 西村三郎「東アジア本草学におけ
る植虫類」, 以下の小見しは略す. (木村陽二郎)

□Mapping Sub-Committee, National Council for
Science and Technology, Nepal: **Index of Geographi-
cal Names of Nepal Vols. 1**: 429 pp (1987), **2**:
465 pp (1988), **3**: 402 pp (1988), **4**: 350 pp
(1988), **5**: 299 pp (1988). Mapping Sub-Commit-
tee, Kathmandu. 各 Rs. 300 (ネパールルピー).

ネパール全域の地名が県 (Zone), 郡 (District)
でまとめられ, その中は地名のアルファベット順
に配列されて, 経緯度, 高度が示されている. 地
名数は約46,000件である. ネパールには県が14あ
り, それらが東から2~3県ずつまとめられて各
巻を構成する. カトマンズの属するBagmati Zone
はVolume 2である. 川の場合にはその長さ, 湖

では面積が記録されている。これらのデータは1インチ1マイル図(1: 63,360)から採録したもので、中には現地調査で得た地名もあるとのことである。一国の地名をすべて記録することは、政治的な有用性はもちろんだが、人文科学、自然誌科学の観点からもきわめて応用性の大きいデータベースを構築することになり、その利用価値は絶大である。カトマンズの書店(たとえば S. M. Trading Center, New Baneswar)で入手できるとのことである。地図をはじめこういう地理的データは、とかく秘密扱いされ勝ちだが、発展途上国でもこのように公開されるようになったことは喜ばしい。地名が郡単位でまとめられているので、われわれには使いにくい、本書はマイクロコンピュータで編纂されているから、フロッピーデータが提供されることは期待できる。とは言っても、ローマ字化された綴りにはわれわれの感覚とはズレるものがある。たとえば「村」は gaon ではなく gaun であるが、こういうものは慣れるより他はあるまい。官製のものだけに Everest はなく、Sagarmatha の後にかっこ付きで出ているのみである。私の作ったヒマラヤ地名索引 ed. 5 (1988) は、ネパール地域に関しては、これでもはや無用のものとなったはずだが、データベースを用いて比較してみたら、ヒマラヤ地名索引の30~40%の地名は、どういうわけかこの Index に載っていないことを知った。私の索引には調査の途上で聞き書きした地名があり、それには自己流の綴りが用いられているし、スペルの僅かな違い、たとえば ch と chh とか lam と lamo のような、正誤がわからぬまま並べてある。これはこれで有用性があると思うので、ヒマラヤ地名索引の利用価値はまだ残っていると
言っておこう。(金井弘夫)

□三浦宏一郎：菌類認識史資料(巻) 185 pp. 1996. 自費出版。非売品。

わが国の古典に出現する菌類関係の単語や記述を網羅しようという試みである。参照された文献は、基本文献として常陸国風土記、古事記など9篇、説話集として宇治拾遺物語など19篇、狂言として合柿など10篇、その他2篇、合計40篇におよぶ。これらのすべてを通読して、菌類に関係ある単語ばかりでなく、菌類と思われる記述、そのうゑ菌類を連想させる言い回しまで発掘しようというのだから、おそろしいほどの根気と、和漢の文化についての下地を必要とする。たとえば「…母にあい竹の、涙に…」という狂言の台詞の「竹の涙」のくだりを、史記にある斑竹の伝説からの引用と考え、その成因が菌の感染によるため、と連想するのだから、著者のうち込み方が想像できる。小学校時代の教科書に、清少納言の「香爐峰の雪」のエピソードがあったことを思い出した。古典から思いのままにトピックをとりあげる安直なやり方は、語源論をはじめとして文章を書かねばならないときによく行われるが、それを拾い尽くそうという大変な仕事、ぜひ続けていただきたい。古い絵画や道具に描かれた植物についても、その同定と移入や認知の時代考証を文科系の人がやっていたことがあるが、発展していない。目立たないが日本文化の理解に大事な仕事である。索引がないと折角拾いだした用語や現象を読者がたどることができないので、是非心掛けてもらいたい。入手希望者は下記に葉書で連絡されたい。350-
坂戸市 三浦宏一郎。(金井弘夫)